
鮫アイス

三村りゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鯨アイス

【Nコード】

N1011I

【作者名】

三村りゅう

【あらすじ】

ネギ畑に囲まれた町で育った田宮は、東京の大学に進学し、長身メガネの秋山くんとルームシェアをしながらも東京の闇と光を堪能する毎日を送っています。田宮くんはおじさん受けする可愛い顔をしているが無類の強い女好き。ドラクエ3では自分以外のメンバーは女戦士で固めるぐらいの強い女好き。そんな折、アルバイトを探していた田宮くんは大学の友達に民宿鯨アイスのパンフレットをもらいます。その表紙に載っていた女の子に一目惚れした田宮くんは……。ラブコメみたいなほのぼのした感じを目指しました！よろし

く
つ
す。

チャプター1 東京

「おじさんはね、若い子のおしりが大大好きなんだ」

世の中紳士ばかりだと思ってた。とゆうよりも信じてた。この街の建物はどれもオシャレでキレイだからかもしれない。

僕はネギで有名な県に生まれた。泥にまみれて遊び、よく農作業も手伝った。東京に憧れ、東京に住むようになって高いビルの屋上近くが赤く光っているのになぜか感動した。あれは何の為に光っているんだろう、といつも疑問に思った。

東京の大学に進学した僕は王道かもしれないけれど、初めての休みに遊びに行くのは新宿だな、と思ってその人に出会った。ただでお茶をご馳走してあげると言われたので、なんて紳士な人なんだろうと思った。世の中は紳士で溢れている、とその発言を聞くまで僕は信じて疑わなかった。だって、ネギと畑以外僕の住んでいた所には何もなかったから。

「つまりはケツハンターなわけだね。お尻をハンティングしたいと願わくばさすりたいと、そしてさもあればモミたいと思ってる。ガツと強めにもみしだきたいとも目論んでいる」

世の中はハードゲイばかりだ、とこの時思った。オシャレな建物に騙されてはいけない。東京とゆう街には魔物が潜んでいる。その魔物は色んな意味で手広く、そして激しい。僕は発狂寸前になりながらも、デザートと杏仁豆腐を口に運ぶ。とてもまるやかだ。

「どうだい？ デザートは美味しいかい？ さて美味しい食事と美味しいデザートを食べた後は……言わなくても解るよね？」

おじさんは怪しく微笑んだ。もう紳士の笑顔ではなかった。獲物を捕らえたライオンのような目の奥の怪しい輝きを僕は見逃さなかった。

「デザート以外に食べる物があるんですか。凄いなオシャレな店だからまだ、デザートがあるんだ」

何にも解らない風に、無邪気に答えた。だって、もう泣きそうだったから。このお店高そう、持ち金50円しかないしな……。

「もう一つのデザートだよ。ぐへへへへ。言わせないでよ。グフッ」

おじさんはかなり怪しく笑いながら照れた。やっぱりデザートの次はそっちのデザートとゆう事になるのは確実だ。でも、それも選択肢の一つとゆうよりは、もともと決まっていた筋書きの一つなのだろうか。運命とゆう奴だ。神秘性はあんまないけど。

「ちょうど、美味しい食べ物体が吸収されて、そっちの方も食べごろなんじゃないかな」

満面の笑みでおじさんが微笑む。ギョエー。だって、無理。そんな形でエンドロール引けない。

「じゃあ、いこっか」

僕がデザートを食べ終わると、おじさんは赤い顔で僕を促した。指差したのは、目の前になぜかあったラブホテル。僕は今までにない力走をその瞬間に発揮した。今思うとラップタイム何秒ぐらいだ

ろうと思う。おじさんも血眼になって追いかけてきたけど、そこは若さで振りきった。でも、まあこうゆうのもよくある話だよね。いや、ないか。あんまり。

「いいか、田宮。世の中にはいい人間と悪い人間がいる。まずはそこをキチンと見極められる眼力を見につけような。田宮自身がデザートになっちゃ、意味がない。人間はデザートではない。デザートは食べるものだ。でも食べられちゃうものではないんだぞ」

アッキーが力説する。それを僕はコクコクと頷きながら聞いた。アッキー（秋山くん）とはルームシェアのサイトで知り合った。もともと僕は学生アパートに住んでいたけど隣人のいびきに耐え切れずアパートを抜け出し、都内で安いアパートを借りようと思い行動していたのだけど東京の家賃の高さにチキンな僕は発狂してしまいアパートを探す事を諦めていた。そんな折ルームシェアのサイトで一緒に住んでいた友達が実家に帰る事になったので部屋を格安で貸しますとゆう投稿を見て僕がメールを送りアッキーと住む事になった。

しばらくしてアッキーが東大に通ってる事をしり僕は愕然とした。生ける学問の神が間近にいるのだ。信じられない。

「田宮はさ童顔だし、可愛く見えるから、ガッツかれんのかもな。そうゆう人に」

アッキーは大学では落研に所属しているらしい。長身で細身でメ

ガネをかけていて、見た目はちょっとフケてるけど後ろ姿はちょいモテそうなオーラを漂わせている。

「でもね、アッキー最初は凄い紳士に見えたんだよ。もう、それはこの人きつと捨て犬拾って育ててます！　みたいなオーラを見にまわってさ」

「甘い田宮。捨て犬を拾うハードゲイだっているだろう？」

アッキーはニヤリと微笑み続けた。

「優しいからって、信用してはならないのだよ。東京とゆう街の光と闇をきっちり見分ける眼力がなくてはこの街では生き残れないんだ田宮よ」

「だって……」

僕が講義をしようとしたらアッキーに睨まれたのでやめておいた。解ってる。世の中いい人ばかりではない事ぐらい、わかってる。若い子のおしりをさすりたい人がいる事もよくわかったけど、それでもそんな日々突然舞い降りる幸福を信じたかったんだよ。僕はさ。

「田宮、明後日から夏休みだろどうすんの、予定は？」

「うーん」

僕が悩んでいるとアッキーが

「新宿か？」

とふきだしそうな顔で聞いてきたので、首をブンブンと振って答えた。いや、もう新宿はごめんです。

「とりあえず、バイト探そうと思ってる」

「バイト？ もうバイトしてんじゃない？」

アッキーが訝しげな顔で僕を見返す。

「短期のバイトだから先月で期間終了なんだよ。だから夏休みをフルに働けるバイト探さなきゃと思って」

「そうか。働き物なんだな、田宮。えらいよお前」

アッキーがポケットからハンカチを取り出して大袈裟に目もとを拭う。アッキーは勤労学生とゆうキーワードにすこぶる弱い。自分は医者の子だからお金には困っていなくて、バイトもしていないらしい。正直どんだけ格差だよと思う。

「がんばってな田宮」

アッキーはハンカチでチーンと鼻をかむとそのハンカチをひらひらと振って応援してくれた。

「アッキーは夏休みは？」

僕が聞くアッキーは頬を赤らめて答えた。

「俺は彼女とデート」

「へえー……」

いわくつきの視線をアッキーに投げかける。アッキーはそそくさと視線をそらす。なんだよほんと。いいなあデート。

彼女か……。確か、音大に通ってる子だったよな。アッキーの彼女って。名前はなんだったっけ？

それから僕はアッキーの作ってくれたグリーンカレーをテレビのお笑い番組を見ながら、もくもくと食べた。食べる時はもくもくと食べるのが僕たちの暗黙の了解になっていて、野生の動物じゃないけど、獲物にありついている時はとにかく集中したいのが僕らのスタイルなのだ。濃厚なグリーン野菜が溶け込んだグリーンカレーは程よい辛さで心地良く胃に落ちていく。

「あ、この人好き」

女の子2人組みのお笑いユニットがテレビの画面に映ったので僕は言った。

「あー、わかる。お前好きそうだな、こつゆう子。強そうな子」
「うん」

僕ははにかんで答えた。そうなのだ、僕はなぜだかちょっと強そうな女の子が好きなのだ。グリーンカレーを食べ終えると、冷蔵庫からクリームがたっぷり入ったクリームプリンを取り出すと、レポートを書いているアッキーの隣で微笑みながらプリンを食べた。それを見てアッキーが

「お前甘いものほんと好きな」

と呆れながら答えた。その夜は春の終わりを告げる強風が吹いた次の日で、昼間はにわかには暖かい風が吹いていたのに、夜になるとヒンヤリと冷たい風が窓から入りこんできて肌寒い。

僕はジャージのチャックを閉めて、さむっ、とアッキーに対して言った。でもアッキーは窓を閉めてくれなかった。最近気づいた事

だけれど、どうやらアッキーは暑がりなようなのだ。僕達はルームシェアを始めた頃よりはだいぶ親しくなったけれど、まだまだ知らない事が沢山あるなとアッキーのレポートに真剣に取り組んでいる横顔を見ながら思った。

「でさー、ちょー可愛いケムンパスのボールペン」

同じ学部の木下さんがロプトで売っていたらしい、毛虫のボールペンをペンケースから取り出すと見せてくれた。僕はそれを見て思った。あまりにも毛虫部分がリアルすぎて、正直可愛いとはあまり思えなかった。

「木下さん、そのどこら辺に惹かれたの？」

木下さんは僕の肩をバンバン叩きながら

「わかんないかなあー、チロル。この本物を思わせる立体的な毛虫のフィギュアがペンを押す部分になっている所がこのボールペンのミソなのよ。しかも、この等間隔の毛の生え方。ここまで再現されてんのよ。も、ちょー可愛い」

木下さんがケムンパスのボールペンにすりすりする。そうかなあ、とそれを僕は疑問に思いながら見返す。僕は木下さんにチロルとあだ名で呼ばれている。チロルチョコみたいに小さくてコンパクトな風貌とかわいらしさからきたあだ名らしい。男としては正直微妙な

あだ名だ。

「そついえばさあチロル。あんたバイトは見つかったの？」

「うーん、実はまだ……」

落ち込んでる僕をよそに木下さんはニヤニヤとカバンから何かを取り出す。

「これを見なさい！」

木下さんが自信満々で僕に差し出したなにかのパンフレットらしきものには「民宿鮫アイス」と書かれていた。

「宮城つて鮫が名物みたいでさ。気仙沼漁港の近くにその鮫を使ったアイスが売りの民宿、鮫アイスがあるんだって。そこで夏の間アルバイト出来る学生を募集してるってパンフレットに書いてあったから持ってきたんだ。あたしって友達思いでしょ……ってあんた聞いてんの？」

木下さんの言葉は聞こえていたけれどリアクションができなかった。パンフレットの表紙に乗っていたちよつとガタイのいい女の子に僕は目が釘付けになってしまったのだ。茶色のグラサンに三つ編みにした髪の毛。真赤な上下のジャージには2・A山田、と書かれている。見るからに中高生ではなさそうなその人は中学か高校のジャージを普段着代わりに着ているとゆう事なんだろう。

いけない事なのかもしれないけれど激しく萌えてしまった。山田さんに会いたい。その気持ちは面白いように膨れ上がる。僕はパンフレットをがつつり掴むと木下さんにお礼を言った。

そのまま夏休み前最後の授業をバツクレ、僕は宮城へと向かうた
めの旅費を下ろしにATMへと向かった。

チャプター2 赤ジャージの女の子（前書き）

山田さんに会いたさに全財産を卸しに行った田宮くんは。まるで貢物を姫に渡しにいく王子のようです。

田宮くんは山田さんに会う事に頭がいっぱいだったのですが、実際に会った山田さんはとゆくと……。

恋する猪直球ラブ第2話です。

チャプター2 赤ジャージの女の子

僕の肩には今の服装に不釣り合いなドラムカンバックが揺れている。ATMで全額を引き出した僕はネットカフェで宮城の気仙沼まで一番安く行ける方法を探し、夜行バスとゆうものがある事を知った。

夜遅くに出発して、次の日の朝には宮城に着くらしい。料金も新幹線の2分の一ぐらいでいけるので出費を少しでも抑えたかった僕には大助かりだった。

気になる子に会いに行くという事で、服も買ってしまったし。それにこんなにカジュアルな服選ぶんじゃなかった。ドラムカンバックが浮きまくってしまう……。

黒の細見のジャケットにピンクのVネックのインナーを合わせ、ブーツインのカーゴパンツ。グレーのハットまで被ってちよつと無理した大学生がどのクラブに遊びに行くの？ みたいな恰好をしてしまった事を僕は激しく後悔していた。もともとオシャレとか苦手なので背伸びしすぎたな。好かれないからってこんな見栄を張ってしまった。

本当はオシャレよりも食べたい物がいっぱいある。副々堂の『チヨコ塩饅頭』とかひよこ屋の『ひよこバウムクーヘン』とか。それと食べ放題にもアッキーと一緒に行きたい。普段食べられない肉を嫌になるぐらい腹に詰め込みたい。

「はあ、僕は僕なのに一体何になりたいってゆうんだろ……」

帰宅途中のサラリーマンの群れや、僕なんかよりも数倍大人っぽくてオシャレな学生が行き交うホームで僕は一人つぶやいた。帰宅ラッシュの時間が過ぎても池袋は人が途切れる事がない。

夜行バスは池袋の西口からほど近い銀行の前から出発するらしい。僕は必要最低限の着替えと、寝巻き。それから山田さんへのお土産の入ったドラムカンバックを見つめて思った。やっぱり旅行用のキャリーケースを買えば良かった。

夜行バスの時間までに少し時間があつたので駅中にあるお弁当屋で栗おこわを買った。秋の味覚が堪能できるような季節になったのだなと実感する。50代ぐらいの優しそうなおばちゃんが、お茶をおまけで入れてくれた。僕はお礼を言うとはくほくした気持ちで集合場所の銀行前へと向かった。

集合場所の前にはちらほらと人が集まっていた。僕と同じ年ぐらいの若い子もいれば、出張と思われる30代ぐらいのサラリーマンもいた。それぞれまだまだ人の波が途絶えない池袋に疑問も抱かず慣れた手つきで携帯をいじったりタバコを吸ったりしていた。

みんなどうして夜遅くてもこんなに人がいるとか疑問に思わないんだろう。東京に住んで半年が経ってもまだ僕には何かのお祭りのように見える。僕の住んでいた街でもお祭りの日だけは人が途絶える事がなかったから。

銀行の入り口の階段に腰を下ろしさつき買った栗おこわを食べていると一台のバスが停まった。バスの車体には池袋へ気仙沼行きと書かれた紙が内側から貼り付けられている。

社内から運転手らしき人が出てくると点呼を始めた。もっている紙に印をつけながら一人一人確認しているようだった。

僕は食べている途中の栗おこわを袋にしまい、点呼をしている運転手さんのもとへ近づいた。

「あの」

僕が声をかけると運転手さんはにこやかに返事してくれた。お名前を伺ってもよろしいですか？

「田宮優馬です」

「田宮さんですね。車内右側のA3番席になります」

運転手さんに社内に促されると運転席のすぐ脇に社内の座席表が貼られていた。僕は一応もう一度確認するとA3番の席へと座った。座り心地は悪くなくてシートを倒せば結構リラックスできそうだ。

僕は座席の上にある荷物を置くスペースにドラムカンバックを入れると、残っていた栗おこわを胃に詰め込んだ。から箱が入ったふくろは座席の前のパンフレットがはさんである網の中に入れておいた。

しばらくすると車内が満席になり出発のアナウンスが流れ車内での注意事項のアナウンスが流れた。

僕は眠れるか心配していたけれど、おなか一杯になったせいかアナウンスを聞いている途中で深い眠りに落ちていった。

「田宮さん、田宮優馬さん。気仙沼市役所に着きましたよ。起きてください。田宮さん」

「う、うゝん」

ぼんやりとした視界に心配そうな顔の運転手さんが映った。僕は一瞬ここがどこかわからなくてキョトンとしてしまった。周りを見回したら僕以外誰もいなかった。

「は、はうー。す、すみません。すっかり熟睡してしまっていました」「いえいえ。よろしいんですよ。お疲れなのかと思ってました。なかなか起きられなかったので心配しましたけどね」

そう言つて運転手さんは苦笑いした。僕は何度も頭を下げお礼を言つとバスを降りた。バスを降りた瞬間、濃い海の潮の匂いと魚の生臭い匂いにむせそうになった。そうだな、漁港が近いんだもんな。

気仙沼市役所は学校の校舎のような大きさの建物で入口の近くには白い旗に赤い文字で「ようこそ気仙沼へ！」と書かれていた。

両開きのガラスのドアを開くと入口近くのテーブルに、巨大なこけしが置かれていた。宮城つて確かこけしが有名なんだっけ。入口の近くに受付のお姉さんがいたので民宿鮫アイスが載っていたパンフレットを見せた。

「あゝすみません。この鮫アイスってゆう民宿に行きたいんですけど」

「民宿鮫アイスはですね。道を出られましたら、海沿いに南側に歩かれたらありますよ」

「そうですかぁ。ありがとうございます」

お姉さんはにこやかに答えてくれた。敬語のアクセントが少しなまっついていて、微笑ましかった。僕が出口から外に出ようとしてると男の人に呼び止められた。

「ただ今、ずんだ餅の試食をおくばりしています。よろしかったいかがでしょうか？」

「いいんですかあゝでは遠慮なく」

ウグイス色の餡に包まれたお餅は甘くてとても美味しい。見た目もきれいなのでこれで日本茶なんかがあつたら最高だなーと思った。

「ごちそうさまでした」

お礼を言うと試食を勧めてくれたおじさんが、これ、とぼくに紙を手渡した。紙には宮城名物ずんだモチ！と書かれており。その横にはお店らしきものが印刷されていた。店の看板にはずんずんと書かれていて、そのずんずんの前に用意されたベンチに腰かけた家族が美味しそうにずんだモチに食らいついている。なんとも平和な光景だ。

「よろしかったら是非、お土産にでも」

「あ、はい。すごいおいしかったので買ってきます」

僕がそういっておじさんはうれしそうに笑ってくれた。アッキーに買っていいこう。アッキーはことうゆう和な感じのスイーツ大好きだもんな。

道路の脇の舗装された道を南側に向かって歩く。僕の時計にはコンパスがついているのでどっちが南かすぐにわかった。方向音痴なのでコンパスは常に持ち歩いていたいなと思っていた所ドンキホーテでこの時計を見つけた。いまや僕のマストアイテムになりつつある。

舗装された道がだんだんと狭くなり、海に浮かんで見える家々の数も少なくなり、あたりには建物らしきものがなくなってきた。けやきの木が細々と立っている道を通りすぎると、やがてその小さな建物が見えてきた。

パンフレットに載っていた建物と同じだ。小さくてどこか懐かしい、木造のその建物は、きっと何十年もこの土地に存在しているんだろう。店の看板に書いてある鯨の絵も誰かの手書きで所々かすれている。

僕はその建物にゆっくりと近づく。吸い寄せられるように。近づけば近づくほど僕はこの建物をずっと前から知っているのではないかと不思議な感覚に促される。

引き戸が開けられていてそこからは魚を焼く香ばしい匂いが聞こえてくる。厨房は一階にあるのかな。中から女の人の笑い声が聞こえてくる。

「でね、さっちゃんたら、また顔を赤らめて逃げ出してっちゃ」
「ほんとにーまあ、まあ、山田さんらしいっちゃんー」

え！ 今山田さんって。心臓の鼓動が早まる。

「あ！ 山田さんちようどいい所にきた。あれかつてきてくんろー」
「……わかりました」

か細い、小さな声。今引き戸の奥から聞こえてきた山田さんの声は聞き取れるか聞き取れないかぐらいの声だった。あの体の大きな子があんなに小さい声だなんて以外だった。僕はそのギャップにどぎまぎしつつ、あれは本当に山田さんだったのだろうかと思った。

やがて引き戸が開くと中から赤ジャージの女の子が出てきた。あのパンフレットに載っていたジャージと同じ真赤な色をしていた。ただ違ったのはその体の大きな女の子の表情がやけにおびえている事だった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1011i/>

鯨アイス

2010年10月9日06時25分発行